

詩とソネット

——エミリー・ディキンソンの不滅の芸術——

松 本 明 美

Synopsis: This study aims to consider Emily Dickinson's poetics of immortality, examining the influence of William Shakespeare on Dickinson. Dickinson was an ardent reader of Shakespeare, as seen in her poems and letters, and her work is evident of the fact that she also read Shakespeare's *Sonnets*. Some traces of phrases and metaphors from the sonnets appear in some of her poems on nature.

Shakespeare's well-known sonnet, in which a beautiful lady is compared to a brilliant day of summer, declares that the lady would live as long as people read the sonnet from generation to generation. The brief summer day is compared to the lady's short lifetime; similarly, Dickinson's compact poems on summer convey that although their owner passes away, the essence of roses lasts long, making summer eternal. To explain it in another way, the art, of the poetry or sonnet continues to live even after the death of the poet. In some of Dickinson's poems, the word "lamps" is a metaphor for her poetry; hence, she hopes that her poetry can shed light on the psychological darkness of people even after her death.

In this way, Dickinson persists in her own poetic style while she pays homage to Shakespeare by reflecting some of his poetic thoughts and figures of speech in her poetry. As a result, Dickinson has grown up to become one of the prominent poets in the history of American literature.

I 序 論

アメリカの詩人、エミリー・ディキンソン（1830–86）は、現在ではアメリカ文学史において、不動の地位を獲得している。その主な理由は、彼女が書き残した 1800 編近い詩に見られる、ハイフンを多用するなどの特異な詩のスタイルにあると言って良い。さらに、白いドレスを着用して弁護士だった父親の屋敷に隠棲し、生涯独身を貫いて、ひっそりと人生の幕を閉じた、という伝記的事実が、多くの読者を惹きつけている。このようにごく簡単に

ディキンソンの人生を垣間見れば、彼女は平穏で暮らし向きに困らない生活を送っていたように思われる。ところが、彼女の詩と書簡を読めば、彼女は幾度も人生の荒波をくぐり抜け、挫折と苦悩を経験してきたことが分かってくる。

彼女の人生の中での苦難の1つが、目の疾患にかかり、医者から詩を書くことも読書も禁止されていたことである。¹ 詩作や読書を止められてしまった彼女にとって、そのことがどれほどの苦痛であったかは想像に難くない。なぜなら、読書は彼女にとって、詩作をする上でのヒントを得られるだけでなく、詩的想像力を涵養する上でも必要不可欠なものだからだ。

ディキンソンが読書家であったことはよく知られている。実際、彼女は、書簡の中でも、「詩人については、キーツとブラウニング夫妻、散文については、ラスキンとトマス・ブラウン氏と聖書です」²と書き記している。ディキンソンは若い頃からこういった詩人や作家たちの作品を読み、自分の詩作の糧にしていた。ディキンソンはアメリカの詩人ではあるが、読書を通して、アメリカを超えてイギリスの詩人や作家たちの作品を愛読し、読書の世界に耽溺していたことが窺える。

さらに、興味深い事実は、ディキンソンが詩や書簡の中でウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）に言及していたことである。ディキンソンにとって、シェイクスピアは彼女の多感な少女時代から、偉大だが身近な劇作家だった。例えば、ディキンソンは、「シェイクスピア・クラブ」³に入って、そこで様々な劇作品を読んだことが分かっている。そのことは、例えば次の詩を読めば理解できる。

Drama's Vitallest Expression is the Common Day
That arise and set about Us —
Other tragedy

Perish in the Recitation —
This — is the best enact
When the Audience is scattered

And the Boxes shut —

“Hamlet” to Himself were Hamlet —

Had not Shakespeare wrote —

Though the “Romeo” left no Record

Of his Juliet,

It were infinite enacted

In the Human Heart —

Only Theatre recoded

Owner cannot shut — (Fr 776)⁴

この詩では、「シェイクスピア」の名前とともに、彼の有名な『ハムレット』の「ハムレット」、それに、「ロメオ」や「ジュリエット」の名前も言及される。このことから、ディキンソンがいかにシェイクスピアの作品からインスピレーションを受けて、この詩を書いたかが想像できる。「シェイクスピア・クラブ」に所属していた彼女の少女時代から、成熟した大人の女性になるまで、シェイクスピアは、詩人としてのディキンソンに夢と希望を与え続けたと言っても言い過ぎではない。776 番の詩のような、彼女の詩の中でシェイクスピアに直接言及する例はほとんどないが、書簡の中では何度か彼の名前を見ることができる。例えば、「シェイクスピアが生き残っている間は、文学は安泰である」⁵と書かれていたり、「シェイクスピアを見つけた人は、将来性がある」⁶と書かれたりして、この劇作家を賞賛している。また、*An Emily Dickinson Encyclopedia* によれば、ディキンソンの詩には、他にも、『リア王』、『オセロ』、『嵐』などの作品からインスピレーションを受けたと思われる個所が見受けられるという⁷。

一方で、『ソネット集』を上梓したシェイクスピアは劇作家かつ詩人として知られるが、このシェイクスピアの『ソネット集』とディキンソンの繋がりにについては、研究がほとんどなされておらず⁸、いまだ謎めいたままである。それはおそらく、ソネットという詩の形式とディキンソンの詩のスタイ

ルに大きな乖離があるからだと推測できる。しかし、シェイクスピアのソネットを読めば、ディキンソンが影響を受けたのではないと思われる詩文や詩句を発見できるのである。本論では、シェイクスピアのソネットとディキンソンの詩を読み比べながら、両者の影響関係を考察することにする。それによって、ディキンソンがシェイクスピアを詩人としても崇敬していたことを証明していきたい。そのために、本論では、2つのテーマを設定することで、ディキンソンとシェイクスピアのさらなる詩的な結びつきを考察していくことにする。

Ⅱ 詩人たちの夏

我々読者がディキンソンの詩集を読むとき、夏をテーマにした詩が多く見受けられることから、夏は、ディキンソンにとって最も好きな季節であることが分かる。一方で、シェイクスピアの『ソネット集』の中にも夏をテーマにしたものがある。夏は、二人の詩人たちの想像力を刺激する季節なのだろうか。まずは、シェイクスピアのソネットから考察を試みる。

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date:
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimmed;
And every fair from fair sometime declines,
By chance, or nature's changing course, untrimmed:
But they eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou ow'st,
Nor shall death brag thou wander'st in his shade
When in eternal lines to time thou grow'st:
So long as men can breathe or eyes can see,

9

So long lives this, and this gives life to thee. (Sonnets No.18)

このソネット 18 番は、最も人口に膾炙したものだろう。冒頭で、美しい「あなた」が、「夏の 1 日」に喩えられている。しかし、「夏」の季節は変わりやすく、長く続くとは限らない。そのように、女性の美貌そのものも、いつまでも不変であるとは言い難い。美しいものも、いつかはその美を失う。しかし、後半では、「永遠の夏は、色褪せることはない」と主張されている。最後の 2 行で、「人が息をし、目が見える限り／この詩が生きている限り、これはあなたに命を与える」と締めくくっている。

確かに、「夏」は美しい季節であるに違いないが、天候の変化が大きく、すぐに次の季節に移ってしまう。同様に、女性の若さや美しさは「夏」の盛りに喩えられるが、「夏」と同様に、その美貌はいつまでも保つことはできず、衰えてしまう。しかし、詩人が詩の中で、女性の美しさを賛美し、それを「夏」という隠喩で表現することによって、永遠の美しさを保持することができる。シェイクスピアは、美は移ろいやすく儚いものだと思っていた。だが、自らの言葉による表現力で、永遠のものにすることができると信じていたのではないだろうか。確かに 400 年経った今でも、7 行目の“fair from fair”などのアリタレーションや、脚韻などの詩の技巧に溢れたこのソネットは、数多くの人々に脈々と読み継がれている。

ディキンソンの詩の考察に入る前に、もう一つ、シェイクスピアのソネットを読んでみよう。

Those hours that with gentle work did frame
 The lovely gaze where every eye doth dwell
 Will play the tyrants to the very same,
 And that unfair which fairly doth excel.
 For never-resting time leads summer on
 To hideous winter, and confounds him there,
 Sap checked with frost and lusty leaves quite gone,
 Beauty o'er-snowed and bareness everywhere;
 Then were not summer's distillation left,

A liquid prisoner pent in walls of glass,
 Beauty's effect with beauty were bereft,
 Nor it, nor no remembrance what it was.
 But flowers distilled, though they with winter meet,
 Leese but their show; their substance still lives sweet.
 (Sonnet No.5)

このソネット 5 番では、「時」が「暴君」の役割を演じて、「美」を奪おうとする。そして、擬人化された「時」は、「夏」を「冬」へと急き立てる。葉もすべて落ち、「美」は「雪に覆われ」て「不毛」の状態へと変容する。「時」は留まることがないため、時間をかけて「美」を熟成したものの、その状態を長く留めることはしない。ここでは、「時」の良い面と悪い面の両方が描かれている。「冬」は不毛の状態を表す隠喩となり、美しいものを覆い尽くして見えないものにする。「夏」のような美しきものを永遠のものにするためには、このソネットの後半に書かれているように、「花」のエッセンスを、「囚人」のように「硝子」の瓶に閉じ込めておくことが必要である。「抽出された花」のエッセンスは、芳醇な香りとなって命脈を保ち続ける。たとえ、「冬」が来ても、その香しい芳香は残る。つまり、その「美」の「本質」(“substance”)や神髄は、変わることなく「時」を超越していくのである。このソネットの言いたいことは、「時」がどれほど「美」に抗おうとしても、「美」の「本質」は、時代を超えて人々を魅了するということである。

一方、ディキンソンの方に目を向けると、詩人と詩という芸術の役割について何編かの詩を書いている。まずは、446 番の詩を引用する。

This was a Poet —
 It is That
 Distills amazing sense
 From Ordinary Meanings —
 And Attar so immense

From the familiar species
 That perished by the Door —
 We wonder it was not Ourselves
 Arrested it — before —

Of Pictures, the Discloser —
 The Poet — it is He —
 Entitles Us — by Contrast —
 To ceaseless Poverty —

Of Portion — so unconscious —
 The Robbing — could not harm —
 Himself — to Him — a Fortune —
 Exterior — to Time — (Fr 446)

唐突に代名詞 “This” で始まるこの詩は、ディキンソンの詩論を議論する上で欠くことのできない作品である。1行目から2行目にかけて代名詞だけでも3個見受けられる。しかも、第3スタンザの「彼」が、この詩だけでは誰のことか特定できず、さらに謎めいた印象を読者に与えている。詩の内容をさらに分析すれば、「詩人」とは「ありふれた意味から／驚くべき意味を蒸留」する人のことだと定義されている。つまり、普通の人が普段は気が付かないことに「詩人」は注目して、それを詩にまとめる。その詩を読んだ読者が、詩によって「蒸留」された「驚くべき意味」に意表を突かれ、本来の「意味」を再認識することになる。

第3スタンザでは、「詩人」は画家のように、「絵の意味を／解く人のこと」と定義されている。このことは第2スタンザの、「普通の花から／限らない香油を搾り取る」という「詩人」の役割を言い換えている。この表現は、シェイクスピアのソネット5番の表現と重なる。シェイクスピアやディキンソンだけでなく、本物の「詩人」は、「ありふれた」と思われることに注意を傾け、その研ぎ澄まされた感性と洞察力でソネットまたは詩という

形式にまとめる。無駄な言葉やフレーズを一切省き、「ありふれた」ものを生き返らせるのである。

「詩人」である「彼」にとっては、「彼自身が財産」なのである。そして、「時間を超えて」生きているのである。それはまさに、「詩人」が普通の人々とは異なる資質を具えていることを意味する。たとえ誰かが「詩人」に害を与えるようなことをしても、特別な存在である「詩人」は意に介さない。

ここでの“**He**”は、直截的にディキンソン自身とは言い難い。しかし、ディキンソンを含めた偉大な詩人のことを表していると考えられる。または、ソネット 5 番と着想が少し似ていることから、シェイクスピアのことを暗示しているとも考えられる。この“**He**”という代名詞ゆえに、この詩は、様々な解釈を可能にする、謎の多い詩であることがわかる。

シェイクスピアが、ディキンソンにとって、第 1 スタンザに合致するような詩人であるとみなされていたのではないか、という推測を裏付けるようなもう一つの詩がある。

Essential Oils — are wrung —
The Attar from the Rose
Be not expressed by Suns — alone —
It is the gift of Screws —

The General Rose — decay —
But this — in Lady's Drawer
Make Summer — When the Lady lie
In Ceaseless Rosemary — (Fr 772 B)

「大切な油は絞り出される」で始まるこの詩は、「薔薇」と「婦人」のイメージが全体を支配して、女性的な雰囲気醸し出している。ただし、「香油」(“Attar”)が創造される過程は、容易なものではない。それは、「太陽」だけでは搾り取られず、「ねじの賜物」とあるように、過酷な作業を通じて生み出される。“Screws”には、様々な意味があるが、残酷で暴力的なイメージが内在されているという。¹⁰つまり、花の「薔薇」が強い圧力をかけられ

て、その「香油」が徐々に絞り出されていくのである。

後半のスタンザでは、「普通の薔薇は朽ちる」と書かれ、植物の花が華麗に花を咲かせる時期は、長くは続かないことを端的に示している。その次の行では、「普通の薔薇」から絞り出された「香油」は、「婦人の引き出しの中で／夏を作る」と書かれている。「薔薇」から抽出された「香油」は、「婦人の引き出し」の中で、香りを放ち、その香りを嗅いだ人に「夏」を思い出させることになる。最後の行は、少々逆説的である。なぜなら、「婦人」が「終わることのないローズマリーの中で横たわる時に」も、その香りが弱まることなく薫り続けるからである。言い換えれば、その混じり気のない「薔薇」の「香油」は、往く夏を経ても、ましてや、「婦人」が亡くなった後でも、香りが弱まることはない。いつでも「引き出し」の中で、「夏」を創り続けるのである。

アンダーソンが、芸術そのものは芸術家がこの世を去った後も残っていく¹¹と言及しているように、この「香油」は詩という芸術を表す隠喩であると考ええることも可能である。詩人、特にディキンソンの場合、極端に詩を圧縮させて言葉を選んで詩を創り出すからだ。詩を創作する過程には、様々な苦勞が伴う。しかし、その苦勞の末にできた詩は、詩人の死後も読まれ続け、詩の世界を再現し続ける。夏が過ぎても、詩人が死んでも、「大切な油」すなわち、本物の詩は、不滅の生命を獲得して生き続けていくのである。

シェイクスピアのソネット 5 番と比較するなら、ソネット 5 番における、「抽出されたエッセンス」の隠喩は、ディキンソンの「薔薇からの香油」に匹敵すると言える。ソネットでは、「夏の花」から抽出した「香水」である「美」の「本質」は永久に変わることはない。ディキンソンの「薔薇からの香油」も、いつも香しい芳香を放ちながら「夏」を創り出し、時代を超えても衰えることはない。シェイクスピアのソネット 5 番は、「時」と「美」がキーワードになっているものの、彼自身もまた芸術の不滅性を感じ取っていたのではないか。ディキンソンが、花の「香油」をモチーフにしながら物事の本質を見極め、その永久性を見定めていたことは、シェイクスピアのソネットと何ら無関係ではなかったと考えられる。

次に、シェイクスピアのソネットを賞賛したものと思われる詩を取り上げる。

The One that repeat the Summer Day —
 Were Greater than Itself — though He —
 Minutest of Mankind — should be —

And He — could reproduce the Sun —
 At Period of Going down —
 The Linging — and the Stain — I mean —

When Orient — have been outgrown —
 And Occident — become Unknown —
 His Name — Remain — (Fr 549 B)

「夏の日を繰り返すことができる人がいれば／夏の日より偉大だろう」で始まるこの詩は、誰のことを明らかにしていない。しかし、その人が「人類の中で最も取るに足らない人であっても」、「偉大」だという。さらに、その人は、第2スタンザが示しているように、「日が沈む時には／太陽を再生することができる」という。最後のスタンザでは、多少大仰な表現がなされているが、「東洋が大きくなり過ぎて／西洋が未知のものとなっても／その人の名声は残る」と書かれている。

ディキンソンにとって、「夏」が大事な季節であることは言うまでもない。だからこそ、「夏の日」を永遠のものに留め、後世に残すことができる人を、「偉大」な人物だとみなしたのである。「夏の日」を繰り返す、すなわちそれを再現できる芸術家のことを「偉大」とディキンソンはみなしている。「偉大」な芸術家とは、特に、画家、小説家、詩人のことである。あるいは、小論で考察したように、「夏」を美しいものとみなし、「美」と芸術を賞賛するソネットを書いたシェイクスピアのことを指しているのかもしれない。最終行に、“His Name”と性別が明示されているが、尊敬する男性詩人の1人であるシェイクスピア本人のことを指しているとも考えられる。仮にシェ

イクスピアであったとすれば、この詩の語り手がシェイクスピアの偉大さを誇張しているかのような詩となっていることは間違いない。

このように、ディキンソンにとってもシェイクスピアにとっても、芸術、特に詩の不滅性をそれぞれの作品の中で強調しようとしたことが分かる。ディキンソンがシェイクスピアのソネットを熟読し、自らの作品に取り入れようとしたと推測できる。また、さりげなくではあるが、549番のように、シェイクスピアに対する敬愛の念を示していたとも考えられるのである。

Ⅲ 詩人の精神

Ⅱ章では、シェイクスピアとディキンソンの夏をめぐる詩を中心に、これら二人の詩人の共通性を考察した。この章では、二人の詩論に関する考え方について論考を試みる。まずは、シェイクスピアのソネット 55 番である。

Nor marble, nor the gilded monuments
Of princes, shall outlive this powerful rhyme;
But you shall shine more bright in these contents
Than unswept stone, besmeared with sluttish time.
When wasteful war shall statues overturn
And broils root not the work of masonry,
Nor Mars his sword, nor war's quick fire, shall burn
The living record of your memory:
'Gainst death, and all oblivious enmity,
Shall you pace forth; your praise shall still find room
Even in the eyes of all prosperity
That wear this world out to the ending doom.
So till the judgement that yourself arise,
You live in this, and dwell in lovers' eyes. (Sonnet No.55)

冒頭では、「大理石の墓も、王子の金ぴかの記念碑も／この力強い詩文より長く生きることはないだろう」と語られている。さらに、「だらしのない時

で汚され、掃かれてもいない墓石の中よりも／これらの詩文の中にこそ君は輝くだろう」と書かれている。つまり、ここでは詩の不滅性が強調されている。どれほど黄金で飾り立てられていようとも、「記念碑」などより、「詩文」の方が生き長らえていくのである。たとえ「死」や「忘却の敵」が「あなた」に迫ってきても、「あなたは歩を進めていこう」。そして最後に、「あなたは、この詩文の中に生き、愛する人々の目の中に住み続ける」と締めくくっている。

詩の中で描かれている「あなた」は、永遠の生命を得て時代を超えて生き続けるということが、このソネットには暗示されている。たとえ人間が有限の存在であっても、詩の中で描かれることになれば、それを目にする人がいる限り賞賛され、愛され続けることになる。これは、ソネット 63 番の最後の 2 行で、「彼の美はこれらの黒い詩文の中に見られ／この詩文は生き続け、彼はそこで今でも緑である」(“His beauty shall in these black lines be seen, /And they shall live, and he in them still green.”) と表現されている。この “black lines” とは、¹² “verse” のことを指すと断定することは可能だろう。「黒い詩文」とは、言葉で成り立つ詩のことであり、これを読む人がいる限り、「彼」は若々しさを保つことができるのである。

そして、もう 1 編のソネットを引用することによって、考察を深めたい。

But be contented when that fell arrest
Without all bail shall carry me away;
My life hath in this line some interest,
Which for memorial still with thee shall stay.
When thou reviewest this, thou dost review
The very part was consecrate to thee;
The earth can have but earth, which is his due,
My spirit is thine, the better part of me;
So then thou hast but lost the dregs of life,
The prey of worms, my body being dead,
The coward conquest of a wretch's knife,

Too base of thee to be remembered:

The worth of that, is that which it contains,

And that is this, and this with thee remains. (Sonnet No.74)

このソネットでは、死が近づき、「私」の肉体を蝕もうとしている。ところが、「私の人生」はこの詩行に留まり、そして「この詩は記憶としてあなたの元に留まるだろう」と語り手が確かな信念を持って、「あなた」に伝えようとしている。そして、「私の精神はあなたのもの」と語られている。最後のカプレットでは、「肉体の価値は、それが持つ精神にあり／そしてそれはこの詩のことであり、これはあなたと共に留まる」と結ばれている。つまり、このソネットでは、「肉体」が死によって滅びようとも、「精神」は残る。そして、「肉体」から出た「精神」こそが「詩」となって、「あなた」のところに永遠に残り続けるという。「詩」は永遠の命を得て、人々の心を揺さぶり続けるのである。シェイクスピアは、肉体を持った詩人が、時の「ナイフ」に生命を絶たれたとしても、詩が詩人の精神を内包して生き続けることを願っていた。

詩の不滅性については、同じくディキンソンも詩の中で表現している。930番の詩を引用してみよう。

The Poets light but Lamps —

Themselves — go out —

The Wicks they stimulate

If vital Light

Inhere as do the Suns —

Each Age a Lens

Disseminating their

Circumference — (Fr 930)

「詩人たち」がそれぞれに「ランプを灯す」と、その後彼らは、「姿を消してしまう」。そして、「彼らは芯を刺激する」役目を果たすが、再び姿を現すことはないのである。もし、彼らが灯した「生命の光」が、「太陽のように内

在するならば／それぞれの時代のレンズとなって／その円周を／広げていく」と締めくくられている。

2 連から成るこの引き締まったスタイルの詩は、「ランプ」が詩の隠喩となっている。その詩が「芯」を刺激されることにより、「生命の光」が「レンズ」となって、時代を経て拡散していくのである。「それぞれの時代のレンズ」とは、詩人の死後に詩を読む読者たちを指している。そして、それぞれの読者が時代ごとに解釈を広め、詩はその解釈に臆することなくさらに生き延びていくのである。この詩は、「詩人たち」の存在または生命力よりも、彼らが遺した詩の不滅性と生命力を表している。「詩人たち」の仕事は、読者を刺激し続けるような詩を書き残していくことである。一方、詩の方は読者から次の読者へと、影響を与え続けていくのである。

この「ランプ」の詩とよく似た詩がもう 1 編ある。

The Lamp burns sure — within —

Tho' Serfs — supply the Oil —

It matters not the busy Wick —

At her phosphoric toil!

The Slave — forgets — to fill —

The Lamp — burns golden — on —

Unconscious that the oil is out —

As that the Slave — is gone. (Fr 247)

この詩の中で登場する人物は、「奴隷」だけである。「ランプ」は「内側」で絶えず燃え続ける。「奴隷」が「油」を供給しても、あるいは「油」を供給し忘れても、「忙しい芯には問題ではない」のだ。「ランプ」はさらに「黄金色」に燃え続ける。この「ランプ」は「油」が切れても、「奴隷」が姿を消しても、お構いなしに盛んに燃えているのである。

この詩は先ほどの 930 番とは異なり、「詩人」が「奴隷」に変わっているため、「ランプ」を詩の隠喩とみなすことに無理があろう。これら二つの詩に共通しているのが、「ランプ」が人間をまるで意識せず、無関心に燃え続

けていることである。しかも、両方の詩では、「詩人たち」も「奴隷」も存在感がなくなり、姿を消してしまう、つまり、この世を去ることを暗示している。「奴隷」も「詩人たち」も労働者の1人と見なせば、彼らの命は有限である。しかし、彼らが手掛けたもの、ここでは「ランプ」が、何十年も何百年も、勢いが衰えずに盛んに燃え続けることになる。2つの詩では、働く「詩人たち」と「奴隷」対無限の生命を背負っている「ランプ」の対比が端的に示されている。247番より後に書かれた930番の方が、「詩人」という言葉が出ているため、詩人としてのディキンソンの実像により近づいていると言える。つまり、ディキンソンが詩の不滅性に確信を抱き始めたことの証左となっている。

最後に、ディキンソンが詩人と詩の関係を暗示的に表現した詩を取り上げる。

If I can stop one Heart from breaking

I shall not live in vain

If I can ease one Life the Aching

Or cool one Pain

Or help one fainting Robin

Unto his Nest again

I shall not live in vain. (Fr 982)

語り手の「私」が、自分自身が生きることの価値を述べている。「私」自身も「傷ついた人」を助けたいと願っている。しかし、「1羽の弱ったコマドリ」を「巣に戻すことができれば」と控えめに述べることで、小さな行動でも大きな助けになることを暗示している。この詩は未来形で表現されているため、現在はその思いが達成されていないのかもしれないという「私」の認識が仄めかされる。だからこそ、将来的に自分の詩が、自分の代わりにその役割を果たしてくれることを望んだのではないか。たとえ自分がこの世を去っても、自分が書き残した詩が、「傷ついた人」を癒すことになれば、それこそが自分の使命であることをディキンソンは切望していたのだろう。

シェイクスピアのソネットとは異なり、ディキンソンの「私」には「あなた」に相当する相手が出てこない。しかし、二人の詩人に共通するところは、「詩人」が永遠性を付与された特別な存在だと主張していないことである。代わりに、「詩」が「詩人」たちの「精神」を代弁するかのようになり、読者の心に働きかけ、時代を超えて生き続けることを、二人の詩人たちはそれぞれに願っていたのではないだろうか。

Ⅳ 結 論

これまでの考察で、シェイクスピアのソネット数編と、ディキンソンの詩数編を読み比べながら、両者の詩の特質の幾つかを探ろうとした。Ⅰ章でも論究したように、ディキンソンは若い頃からシェイクスピアの作品を愛読していた。その影響もあってか、自身が詩を書く時には、シェイクスピアのソネットのテーマを模倣したような詩も見受けられた。

Ⅱ章では、シェイクスピアの有名なソネット 18 番を考察した。「夏」という短い季節と対立するかのような、詩の不滅性が際立っていた。詩の中で歌われた美しき人は、永遠の命を保持することができる。その詩が、誰かの目に留まる限り、詩は生き続け、さらに時代を超えて生き続けるのである。

また、ソネット 5 番では「時」が人を美しくもするが、衰えさせもするものとして擬人化されている。しかし、夏の「花」から抽出した「香水」は香しさを保つ。そしてそのエッセンスは、来し方の夏を彷彿とさせるような芳香を漂わせる。つまり、「花」の本質は不変で真実のものである。

ディキンソンもこれらに類似した詩を数編書いた。特に 772 番では、「薔薇」の花の「香油」が絞り出される過程が表現されている。ディキンソンの「香油」には、「ねじの賜物」とあるように、苦痛のイメージが付きまとうが、純粋な「香油」を蒸留することに詩人が心血を注いでいることが分かる。だからこそ、「婦人」が亡き後もこの「香油」は「引き出し」の中で香り続けていく。そして、いつでも「夏」を創る。この件は、シェイクスピアのソネット 5 番と内容が重なる。二人の詩人たちにとって、物事の「本質」

はきわめて純粹で混じり気のない眞実そのものとなる。

小論の次の章では、シェイクスピアのソネット 55 番と 74 番を論述した。55 番では、詩の力強さと永遠性が詠われている。たとえその人が亡くなっても詩の中で賞賛される限り、その人はどれほど価値があるものよりも長く生きる。そして、その詩を読む人々から賞賛を受けることになる。74 番では、「私」は詩の中で命脈を得ることができる。たとえ、死が迎えに来てても、「私」は今度は詩の中で生き続けるのである。大切なのは、その人の肉体ではなく、そこから出た「精神」そのもののなのである。「私」にとっては、詩こそが「精神」そのものである。

ディキンソンの考察では、「ランプ」の詩を 2 編引用した。ディキンソンの詩はソネット形式とは異なり、ごく短い圧縮したスタイルで書かれている。この「ランプ」は詩の隠喩として描かれているが、それを書いた詩人の存在は希薄である。930 番では、「詩人たち」は消えるべき存在であることが端的に述べられている。同じく、247 番の「奴隷」も勤勉ではあるものの、ごく普通の労働者である。しかし、「ランプ」は盛んに燃え続ける。言い換えれば、詩は、詩人が逝去した後も自らの生命力を発揮して、後の世代の読者たちに読み継がれていく。

シェイクスピアは、「夏」を好み、「時」の残酷さ、それに抗うかのような「詩」の不滅性を『ソネット集』に随所に盛り込んでいる。一方、ディキンソンも「夏を繰り返すことができる者」として、シェイクスピアに心酔し、詩と言葉の不滅性を信じていた。だからこそ、ディキンソンにとってシェイクスピアは、彼女にとってお手本となるべき作家であり詩人であったと言える。ディキンソンは生涯、詩人として自分の詩のスタイルを貫徹しているが、シェイクスピアの『ソネット集』から多くのことを学び取っていた。このようにディキンソンはシェイクスピアから影響を受けつつも、彼女は詩を芸術の重要な一翼と見なし、それが後世の人々を励まし、心を揺さぶるような詩を書き続けようと孤軍奮闘したのである。

注

¹ Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974) 606–607 n.

² Thomas H. Johnson and Theodora Ward, eds., *The Letters of Emily Dickinson*, by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1958) 404, No.261.

³ Jane Donahue Eberwein, ed., *An Emily Dickinson Encyclopedia* (Westport: Greenwood P, 1998) 263–64.

⁴ 小論では、ディキンソンの詩の引用は1988年に出版されたフランクリンの3巻本により、Fr 776と記す。R. W. Franklin, ed., *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. by Emily Dickinson (Cambridge, Massachusetts: The Belknap P of Harvard UP, 1998) 731–32, No.776.

⁵ *Letters*, No.368.

⁶ *Letters*, No.402.

⁷ Eberwein, 264.

⁸ Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading, 1836–1886* (Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1966) 60–66. キャップスは、ディキンソンにとって、シェイクスピアの書物がどれほど重要だったかなどを記している。

⁹ Katherine Duncan-Jones, ed., *Shakespeare's Sonnets* (London: The Arden Shakespeare, 2010) 147, No.18. 小論では、シェイクスピアのソネットの引用は、Sonnet No.18と記す。

¹⁰ Beth Maclay Doriani, *Emily Dickinson, Daughter of Prophecy* (Amherst: U of Massachusetts P, 1996) 64.

¹¹ Charles Roberts Anderson, *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise* (Westport: Greenwood P, 1960) 67.

¹² Don Paterson, *Reading Shakespeare's Sonnets* (London: Faber and Faber, 2010) 184.

参考文献

Anderson, Charles Roberts. *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*. Westport: Greenwood Press, 1960.

Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading, 1836–1886*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1966.

Crumbly, Paul and Eleanor Elson Heginbotham, eds. *Dickinson's Fascicles: A Spectrum of Possibilities*. Columbus: The Ohio State UP, 2014.

Doriani, Beth Maclay. *Emily Dickinson, Daughter of Prophecy*. Amherst: U of Massachusetts P, 1996.

- Duncan-Jones, Katherine, ed. *Shakespeare's Sonnets*. London: The Arden Shakespeare, 2010.
- Eberwein, Jane Donahue, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport: Greenwood P, 1998.
- Farr, Judith. *The Passion of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1992.
- Ferlazzo, Paul J. *Emily Dickinson*. Boston: Twayne Publishers, 1976.
- Gilpin, W. Clark. *Religion around Emily Dickinson*. Pennsylvania: The Pennsylvania State UP, 2014.
- Grabher, Gudrun, Roland Hagenbüchle, and Cristanne Miller, eds. *The Emily Dickinson Handbook*. Amherst: U of Massachusetts P, 1998.
- Phillips, Elizabeth. *Emily Dickinson: Personae and Performance*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1988.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974.
- Small, Judy Jo. *Positive as Sound: Emily Dickinson's Rhyme*. Athens: U of Georgia P, 1990.
- Smith, Martha Nell and Mary Loeffelholz, eds. *A Companion to Emily Dickinson*. Malden: Blackwell Publishing, 2008.
- Stonum, Gary Lee. *The Dickinson Sublime*. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- Wardrop, Daneen. *Emily Dickinson's Gothic: Goblin with a Gauge*. Iowa City: U of Iowa City, 1996.
- ウィリアム・シェイクスピア『シェイクスピアのソネット集』吉田秀生訳、東京：南雲堂、2008年。
- 村松俊子『奇想の詩学－シェイクスピア「ソネット集」論』東京：鷹書房弓プレス、2007年。